

The Typology of WH-words An Austronesian perspective

Yuko Otsuka, University of Hawai'i

1. WH 疑問文の種類

- (1a) What did John buy ___? WH 移動
 (1b) What is it that John bought ___? 分裂文
 (1c) What is the thing that John bought ___? 擬似分裂文

1.1 (擬似) 分裂文の構造

- 分裂文は主語の虚辞代名詞、述部の名詞句、関係節によって構成される。

(2a) [_{SUBJ} It] is [_{PRED} what] [_{CP} that John bought ___]

- 擬似分裂文の場合、主語は独立関係節ないしは形式的な先行詞を含む関係節。

(2b) [_{SUBJ} the thing [_{CP} you bought <the thing>]] is [_{PRED} what]]?
 ↑
 関係節化

1.2 日本語の場合

- (3a) ジョンが何を買ったの? 元位置 WH
 (3b) 何をジョンが___買ったの? 焦点移動
 (3c) [ジョンが___買った]のは何? 擬似分裂文

1.3 複数言語に関する観察

- 全ての言語であらゆる種類の WH 疑問文が用いられるわけではない。
- 単一言語で普通の文脈において WH 移動と元位置 WH を両方用いることはできない。(たとえば、日本語は元位置、英語は移動のみ)

2. オーストロネシア言語の WH 疑問文

2.1 一般的な手法は擬似分裂文

セデック語 (Aldridge 2002, 2004)
 ツォウ語 (Chang 2000)
 マダガスカル語 (Paul 2000, 2001; Potsdam 2006a, 2006b)
 マレー語 (Aman et al. 2009)
 インドネシア語 (Cole et al. 2005)
タガログ語 (Richards 1998; Aldridge 2002, 2004)
 パラオ語 (Georgopoulos 1991)
 マオリ語 (Bauer 1991, 1993)
 ニウエ語 (Seiter 1980)
トンガ語 (Otsuka 2000; Custis 2004)
 ツバル語 (Besnier 2000)¹

2.2 トンガ語の WH 疑問文

	元位置	擬似分裂文	移動
WH 名詞句	√	√	*
WH 副詞句	√	√	*
WH 述語句	√	*	*

2.2 タガログ語の WH 疑問文

	元位置	擬似分裂文	移動
WH 中核項	*	√	*
WH 斜格項	*	*	√
WH 副詞	*	*	√

¹ 概論については Potsdam and Polinsky 2011 を参照。

3. トンガ語とタガログ語をめぐる問題点

- 3.1 言語間及び言語内の WH 表現の扱いの違いは何に起因するのか？
- 3.2 WH 副詞句の擬似分裂文がトンガ語では使えるがタガログ語では不可。
- 3.3 トンガ語の擬似分裂文が WH 述語句にだけ使えない。
- 3.4 タガログ語の WH 中核項は移動ができないのに対し、その他の WH 句は移動しなければいけない。
- 3.5 タガログ語では擬似分裂文は中核項の WH にしか使えない。

4. 分析に用いる理論と前提

4.1 ミニマリスト・プログラム (Chomsky 2000 and subsequent work)

- 言語要素は（語彙範疇、機能範疇ともに）素性の束から成り立つ。
 - 解釈可能な素性[F]は特定の値を持つ
 - 解釈不能な素性[uF]には値がない。
- 構文の派生は完全解釈の原理に従わなければならない。
- **完全解釈の原理 (FI):**
 構造物は解釈可能な素性のみによって構成されなければならない。
 (解釈に必要な要素は構文に全て含まれていなければならない)
- uF は合致する解釈可能な素性と一致 (Agree) することにより、その値を付与される。
- 移動は一致が前提で、また主要部が EPP 素性を持っていることで可能になる。
- 移動は動いた位置にコピーを残す。

4.2 WH 疑問文の意味構成

- WH 疑問文はある集合の中から特定の個体を選び出すことを指示する。
- WH 句は集合のタイプ（人物、物体など）を指定する。
- 残りの部分は選択されるべき個体に関して真である命題を表す。

(4a) What did John buy?

(4b) Select an individual x from a set of objects such that John bought x

4.3 WH 疑問文の三構成要素

FI に従えば、WH 疑問文は演算子が変項を束縛している構造を持たなければならない。

$$[OP_x [\dots x \dots]]^2$$

1. 選別せよ → C が持つ [Q] 及び [uWH]
2. ある特定の個体 x → 演算子 [OP]³
3. … x … であるところの → 変項 [WH]

(5) $[_{CP} \text{What } [_{C'} \text{did } [_{TP} \text{John buy } \langle \text{what} \rangle]]]?$

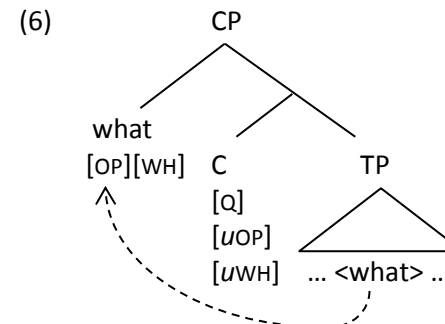
OPERATOR

VARIABLE

5. WH 疑問文の一般的な解析

5.1 WH 移動

- C は構文のタイプを示す素性を持つ。WH 疑問文の場合は [Q]、[uWH] 及び [uOP]。
- WH 句は演算子。その OP 素性が C の [uOP] と一致する。
- C は EPP 素性を持つ → WH 句は [Spec, C] へ移動。
- 残された WH 句のコピーが変項としての機能を果たす。⁴



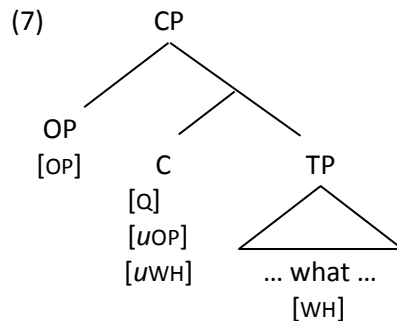
² Cole & Hermon (1998) の「変項束縛条件」。

³ 演算子と変項の機能を区別するためにそれぞれ別の素性、[OP]と [WH]を仮定する。

⁴ Tonoike (2015)は演算子と変項の関係は DP 内ですでに成り立っており、WH 移動の介在は不要だと論じている。

5.2 元位置 WH 疑問文

- WH 句は WH 素性を持つ変項である。(cf. Nishigauchi 1990; Cheng 1991; Cole & Hermon 1998; Reinhart 1998)
- WH 句は演算子ではない。したがって OP 素性は持たない。
- C の[uOP]をチェックするため空演算子が[Spec, C]に生成される。
- この位置から空演算子の変項 (=WH 句) を束縛する。
- WH 句は移動しない。



6. トンガ語の WH 疑問文

6.1 トンガ語の文法

- 述語は文頭に位置する。
- VSO が基本ではあるが、VOS も比較的自由に使われる。
- 能格言語： 'e が能格を 'a が絶対格を表す。
- 動詞構文では時制とアスペクトを示す語 (TAM) が動詞の前に置かれる (8a)。注：述語として用いられる場合、形容詞と動詞の区別は特になし。
- 名詞句が述語の場合、TAM のかわりに述語であることを示す *ko* が文頭に用いられる (8b)。

(8a) Na'e kai 'e Sione 'a e ika.⁵
PST eat ERG John ABS DET fish
'John ate a fish.'

(8b) Ko e faiako 'a Sione.
PRED DET teacher ABS John
'John is a teacher.'

6.2 トンガ語の WH 表現

- WH 名詞は他の名詞と同様に格標識、冠詞、前置詞と共に使われる。
- WH 副詞は他の副詞と同様に文末に用いられる。
- WH 述語詞は他の述語を同様に TAM と一緒に用いられる。

(9)

名詞	副詞	述語詞
<i>hai</i> 'who'	<i>'afē</i> 'when.FUT'	<i>fēfē</i> 'how'
<i>hā</i> 'what'	<i>'anefē</i> 'when.PST'	<i>fiha</i> 'how many'
	<i>fē</i> 'where'	<i>(hā</i> 'what') ⁶

6.3 元位置 WH はあらゆる種類の WH 句に可能

- WH 副詞は元位置が最も好まれる手法。
- WH 名詞句が元位置で使われることは比較的まれ。

(10a) Na'e kai 'a e hā 'e Sione?⁷
PST eat ABS DET what ERG John
'What did John eat?' (lit. 'John ate what?')

⁵ Abbreviations: ABS = absolutive, ANA = anaphor, DET = determiner, ERG = ergative, FUT = future, GEN = genitive, NEG = negative, OBL = oblique, PERF = perfective, PL = plural, PRED = predicate, PRS = present, PST = past, S = singular, SPEC = specific.

⁶ *hā* の述語的用法は *oku hā?* 'What did you just say happened?' に見られるような問い返し疑問文に限られる。名詞として使われる場合は (8a) 及び (10a) にあるように冠詞 *e* が必要。

⁷ VSO と VOS の違いは S と O のどちらが未知の情報かによる。未知の情報は動詞のすぐ後の位置に現れやすい (Otsuka 2005)。元位置に現れる場合、WH の目的語は動詞のすぐ後 (主語の前) に置かれることが多い。

- (10b) 'oku ke sai'ia 'ia hai?
PRS 2S like in WHO
'Who do you like?' (lit. 'You like who?')
- (10c) Te ke 'alu ki fē?
FUT 2S go to where
'Where are you going?' (lit. 'You are going where?')
- (10d) Te ke 'alu 'afē?
FUT 2S go when.FUT
'When are you going?' (lit. 'You are going when?')
- (10e) Na'e fēfē 'a e sivi?
PST how ABS DET exam
'How was the exam?' (lit. 'The exam was how?')

6.4 どのタイプの WH 句も (文頭への)WH 移動は不可。

- (11a) *('a e hā na'e kai 'e Sione?
ABS DET what PST eat ERG John
Intended: 'What did John eat?'
- (11b) *('ia hai 'oku ke sai'ia (ai)?
in who PRS 2.S like ANA
Intended: 'Who do you like?'
- (11c) *(ki) fē te ke 'alu (ki ai)?
to where FUT 2.S go to ANA
Intended: 'Where are you going?'

6.5 WH 名詞と WH 副詞は擬似分裂文の形を取ることが可能。

- 擬似分裂文は特に *hā* と *hai* には最も一般的に使われる。
- WH副詞の擬似分裂文は非文ではないが、非常にまれである。⁸

- (12a) Ko e hā na'e kai 'e Sione?
PRED DET what PST eat ERG John
'What did John eat?'
lit. '(The thing that) John ate is what?'
- (12b) Ko hai 'oku ke sai'ia ai⁹?
PRED who PRS 2S like ANA
'Who do you like?'
lit. '(The one) you like (him) is who?'
- (12c) ?Ko fē te ke 'alu ki ai?
PRED where FUT 2S go to ANA
'Where are you going?'
- (12d) ?Ko 'afē te ke 'alu ai?
PRED when.FUT FUT 2S go ANA
'When are you going?'

6.6 WH 述語詞は擬似分裂文の形を取ることは不可。

- (13a) *ko fēfē na'e 'a e sivi?
PRED how PST ABS DET exam
Intended: 'How was the exam?'
- (13b) *Ko fiha 'oku 'a e tohi ni?
PRED how.much PRS ABS DET book this
Intended: 'How much is this book?'

⁸ 擬似分裂文を使った WH 副詞疑問文は、「この間行ったのはどこだって言ってた？」あるいは「さっき、いつ出かけたって言った？」などの意味で、既知の情報を改めて問い直す際に用いられる。

⁹ トンガ語では斜格関係節には元位置に代名詞の *ai* が必要。

7. トンガ語の WH 疑問文の分析

7.1 トンガ語データのまとめ

- WH 移動は不可
- 擬似分裂文は名詞と副詞（述語以外）のみ可能。

(14)		[-PRED]	[+PRED]
	元位置	Yes	Yes
	移動	No	No
	擬似分裂文	Yes	No

7.2 トンガ語で WH 移動が不可なのはなぜか？

- トンガ語の WH 句は変項の性質しか持たない。
- OP 素性を持たず、演算子としては機能しない。

7.3 WH 述語詞が擬似分裂文の形を取れないのはなぜか？

- 擬似分裂文は名詞構文: DP_{PRED} DP_{SBJ}
- 名詞述語標識である *ko* には選択素性[uD]がある。¹⁰
- WH 述語句には範疇素性[D]がないので併合が不可能。

7.4 WH 副詞が擬似分裂文の形を取ることができるのはなぜか？

- *fē* は副詞ではなく、代名詞である。
 - 品詞の分布を見ると *hai* と同様に、前置詞 (*i* 'in', *ki* 'to', *mei* 'from') を必要とするが冠詞は取れない。
 - 場所を示す指示代名詞の疑問形ととらえることができる。

(15)	近称	中称	遠称	疑問
	<i>heni</i>	<i>hena</i>	<i>hē</i>	<i>fē</i>

¹⁰ ここでは 便宜上 *ko* は 主要部 Pred⁰ と扱っているが、別の可能性として Pred⁰ は音声がなく、*ko* は格標識と同様の要素であるという分析も可能 (Otsuka 2000 参照)。

- '*afē*/'*anefē* も同様に副詞ではなく名詞である。
 - 呼応する表現として '*anai* 'later' や '*anenai* 'a little while ago' がある。
 - 疑問形は前置詞を取ることができないが、時間名詞に用いる前置詞 *i* は口語では特に省略されることが多い。

(16a) Te u 'alu (i) he taimi-ni
FUT 1S go in DEF time-this
'I'm going now.'

(16b) Te tau kamata (i) he 'aho-ni?
FUT 1PL begin in DEF day-this
'Shall we begin today?'

7.5 トンガ語の WH 表現の分類

(17)		[D]	[PRED]	[WH]	[OP]
	<i>hā</i> ¹¹	-	-	+	-
	<i>hai</i>	+	-	+	-
	<i>fē</i>	+	-	+	-
	' <i>afē</i> /' <i>anefē</i>	+	-	+	-
	<i>fēfē</i>	-	+	+	-
	<i>fiha</i>	-	+	+	-

¹¹ 品詞の分布を見ると *hā* そのものには範疇が指定されておらず、冠詞か述語標識の *ko* のいずれかの機能範疇と併合されて初めて語彙項目として機能すると考えるのが妥当だと思われる。

8. タガログ語のWH疑問文¹²

8.1 タガログ語の文法

- 基本の語順は述語が文頭にくる。
- 名詞構文の述語として使われる場合を除いては、名詞句は必ず何らかの標識を取る。これらは格、特定性、及び人名か否かによって形が異なる(18)。
- 文には必ず *ang* を標識として取る名詞句が一つ含まれなければならない、*ang* 名詞句は必ず特定の個体を指すものと解釈され、構文上、主語に似た優位性を示す。
- 動詞は *ang* 名詞句のセータロールに呼応して語形変化する。例えば *bumili* (動作主), *binili* (被動作主), *binilihan* (場所) など。

(18)	中核 [+特定]	中核 [±特定]	斜格	属格
普通名詞	<i>ang</i>	<i>ng</i>	<i>sa</i>	<i>ng</i>
人名	<i>si</i>	<i>ni</i>	<i>kay</i>	<i>ni</i>

8.2 タガログ語のWH表現¹³

- 従来、*sino* ‘who’ 及び *ano* ‘what’ は共に *ang* 形に、*nino* ‘who(se)’ は *ng* 形に相当すると見做されている。
- 斜格形は前置詞の目的語にも用いられる。*na sa ano* ‘in/with what’, *para sa ano* ‘for what’, *para kanino* ‘for whom’ など。

¹² タガログ語のデータは特にソースが示されていない限り Schachter and Otnes 1972 による。

¹³ ここでは中核項、斜格項、副詞の形のみ扱う。その他に関しては Schachter and Otnes 1972 を参照のこと。

(16)	中核	斜格	副詞
	<i>sino</i> ‘who/whom’ (<i>nino</i> ‘who’)	<i>kanino</i> ‘to whom’ <i>sa ano</i> ‘to what’	<i>kailan</i> ‘when’ <i>saan</i> ‘where’ <i>paano</i> ‘how’

8.3 WH 表現は元位置に現れることができない。

(17a) 平叙文(VSO)
Binili ng babae ang bigas sa tindahan.
bought DET woman DET rice OBL store
‘A/the woman bought the rice at the store.’

(17a) *被動作主 WH 元位置
*Binili ng babae **ano**?
bought DET rice what.ANG
Intended: ‘What did a/the woman buy?’

(17c) *副詞 WH 元位置
*Binili ng babae ang bigas **saan**?
bought DET rice DET woman where
Intended: ‘Where did a/the woman buy the rice?’

(17d) *動作主 WH 元位置
Bumili **sino** ng bigas?
bought who DET rice
Intended: ‘Who bought the rice?’

(17e) ??動作主WH 元位置¹⁴
Binili **nino** ang bigas?
bought who DET rice
Intended: ‘Who bought the rice?’

¹⁴ 行為者を指す WH 表現として *nino* が使われることは可能ではあるが非常に稀である (Schachter & Otnes 1972: 512; Kroeger 1996: 212; Richards 2010: 181-182)。行為者を問う WH 疑問文は通常 *sino* を用いた擬似分裂文の形(20a) を取る。

8.4 *ang* 形の *ano* ‘what’ 及び *sino* ‘who’ は名詞構文の述語としては元位置に現れる。一方、*nino* はこの位置に用いることはできない。

(18a) 平叙文(述語—主語)

Libro iyon
book that
‘That is a book.’

(18b) **Ano** iyon
what that

‘what is that?’ (lit. ‘That is what?’)

(18c) **Sino/*nino** si Pedro?
who DET Pedro

‘Who is Pedro?’ (lit. ‘Pedro is who?’)

8.5 *Sino* と *ano* は文頭に移動することはできないが、その他のWH表現は移動しなければならない(Richards 1998, Aldridge 2002, 2004)。¹⁵

(19a) *中核項 WH 文頭移動

***Ano** binili ng babae ___?
what.ANG bought DET woman
Intended: ‘What did a/the woman buy?’

(19b) 副詞 WH 文頭移動

Saan binili ng babae ang bigas ___?
where bought DET woman DET rice
‘Where did a/the woman buy the rice?’

(19c) 斜格(人名) WH 文頭移動

Kanino mo ibinigay ang pera ___?
who.OBL 2.S gave DET money
‘Who did you give the money to?’

¹⁵ Schachter and Otones (1972)は副詞の WH 表現は「稀に」元位置に現れることがあるが、英語で言えば ‘You went fishing, when?’ などの表現と同様に特別な用法であると述べている。

(19d) 斜格(普通名詞) WH 文頭移動

sa ano mo ibabalot ang regalo ___?
Obl what 2.s wrap.fut det present
‘What will you wrap the present in?’

8.6 *Sino* と *ano* は擬似分裂文の形しか取れないが、その他のWH表現は擬似分裂文の形は取ることができない。¹⁶

(20a) *ang*-WH 擬似分裂文

[_{PRE} **Sino**] [_{SB} ang bumili ___ ng bigas]?
what.ANG DET bought DET rice
‘Who bought (the) rice?’

(20b) *副詞-WH 擬似分裂文¹⁷

*[_{PRE} **Saan**] [_{SB} ang binili ng babae ang bigas ___]?
where DET bought DET woman DET rice
Intended: ‘Where did a/the woman bought the rice?’

(20c) *斜格-WH 擬似分裂文

*[_{PRE} **kanino**] [_{SB} ang ibinigay mo ang pera ___]?
who.OBL DET gave 2S DET money
Intended: ‘To whom did you give the money?’

8.7 *nino* は基本的に動作主WH疑問文で用いることはできない(21)。ただし、属格形としては元位置に現れる(22)。¹⁸

(21a) ??Binili **nino** ang bigas? (=17d)
bought who DET rice
‘Who bought the rice?’

¹⁶ データは Ivan Bondoc (pers. comm. November 2015)の提供による。

¹⁷ (20b)と(20c)では動詞の語形は主題フォーカスで、それぞれ(19b)と(19c)との比較になる。

¹⁸ *nino* は属格形であるので(21a)は次のような名詞構文と分析することができる。

[_{PRE} binili nino][_{SUB} ang bigas]直訳すると「お米は誰の買ったものですか？」*sino* に関しては名詞構文としての分析は不可(17d 参照)

(21b) ***Nino** binili ____ ang bigas?
who bought DET rice
Intended: 'Who bought the rice'

(21c) ***Nino** ang bumili ____ ng bigas?
who bought DET rice
Intended: 'Who bought the rice?'

(22) libro **nino** ito?
book whose this
'Whose book is this?'

8.8 タガログ語のデータのまとめ

- WH 表現は元位置に現れることができない。
- *sino* と *ano* は擬似分裂文にしか用いることができない。
- 斜格と副詞の WH 表現は文頭に移動しなければならない。

(23)	中核	中核	斜格	副詞
	<i>ang</i>	<i>ng</i>		
元位置	No	No	No	No
移動	No	No	Yes	Yes
擬似分裂文	Yes	No	No	No

9. タガログ語の WH 疑問文の分析

9.1 斜格と副詞は擬似分裂文の形を取ることができないのはなぜか。

- 関係節化ができるのは *ang* 形のみという関係節に関する制約がある。

9.1.1 斜格項を関係節化することは不可

- 関係節化するためには、動詞が対象となる名詞句が *ang* 名詞句になるような語形を取らなくてはならない。
- 行為者フォーカス、被動作主フォーカス、場所フォーカス、受益者フォーカス、道具フォーカスなどがあるが、時間を *ang* 名詞句にするための語形は存在しない。

- 擬似分裂文の主語として現れる独立関係節自体が非文であるため、これらの WH 疑問文は非文である。

9.1.2 場所及び受益者は *ang* 名詞句として現れることも可能。

- 動詞が場所（受益者）フォーカスの形を取っている場合、擬似分裂文を使って、場所（受益者）を問う WH 疑問文を作るとは可能。
- ただし、その場合、述部に現れる WH 表現はいわゆる *ang* 形 (*ano* または *sino*) でなければならない。¹⁹

(24a) *ang*-locative wh PC (cf. 20b)

[_{PREP} **Ano**] [_{SBJ} ang binilihan ng babae ng bigas ____]?²⁰
what DET bought.LF DET woman DET rice
'What is (the place where) a/the woman bought the rice?'

(24b) *ang*-beneficiary wh PC (cf. 20c)

[_{PREP} **Sino**] [_{SBJ} ang binigyan mo ng pera ____]?
who.ANG DET gave.BF 2.S DET money
'Who is (the person to whom) you gave money?'

9.2 WH 表現が元位置に全く現れることができないのはなぜか。

9.2.1 斜格形と副詞形の WH 表現

- 仮定：C に EPP 素性がある場合、WH 表現の指定部への移動が義務付けられる（よって元位置に残留することができない）。
- 斜格と副詞は（少なくとも形式上は）移動が義務付けられているので、タガログ語のデータは上記の仮定に一致する。
→ タガログ語の斜格及び副詞の WH 表現は演算子である。

¹⁹ この事実を指摘してくれた Nozomi Tanaka (pers. comm. September, 2015) と関連データを提供してくれた Ivan Bondoc (pers. comm. November, 2015) に感謝する。

²⁰ Nozomi Tanaka のフィールドワークによると(24a)で *ano* の代わりに *saan* を使うこともできるが、その場合、「女の人が米を買った場所はどこにありますか」という若干異なった意味になる (pers. comm. September 2015)。この質問に対する返答は「中華街」とか「マニラ」といった広い範囲を指すものでなければならない、「店」や「市場」などの具体的な場所を答えとすることはできない。

9.2.2 *ano* 及び *sino*

- *ano* 及び *sino* の文頭への移動は不可能 → *ano/sino* には演算子素性がない?
- 仮に *ano* と *sino* は演算子ではないと仮定すると、元位置に現れることができないことが説明できない。
- 演算子素性とは別の何らかの理由で *ano/sino* は動詞の項として生成されることができないと考えられる。

9.3 *ano/sino* の述語としての分析²¹

- 従来の分析では *ano/sino* は *ang* 名詞句の疑問形であると考えられている。
- この前提では *ano/sino* の使われ方をうまく説明することが難しい。
- *ano/sino* は述語素性[Pred]を持つかあるいは述語主要部Pred⁰と併合した述語表現であると考えられる。²²

9.3.1 *sino* と *nino* は相補的な分布を示す。

- *Sino* は述語の位置にのみ起こることができる。
- それ以外の位置では *nino* が用いられる: *ka nino* (斜格), *nino* (属格)。

9.3.2 *ano* は変項としての素性を持つ語根である。

- *ano* は述語以外にも複数の用法を持つ (Schachter & Otnes 1972: 507-509)。
- 前置詞の目的語: *sa ano* 'to what', *para sa ano* 'for what'
- 形容詞の語幹: *ma-ano* 'like' (25a)
- 動詞の語幹: 語形変化が可能 (25b)

(25a) Ma-ano sila?
like-what 3PL
'what are they like?' (lit. 'They are what-like?')

(25b) Nag-ano ka ba?
AF.PERF-what 2S Q
'What did you do? (lit. 'You what-ed?')

- 疑問形ではなく不定形としても用いることが可能。

(26a) na-saan ang ano?
where DET what
'Where is whatchamacallit?' but not 'where is what?'

(26b) na-saansi ano?
in-where DET what
'Where is whatshisname?' but not 'where is who?'

9.3.4 形態構造の通時的考察

(27)	普通名詞	人名
中核[+特定]	[ang] <i>ano</i>	si +ano (> <i>sino</i>)
中核[±特定]	[ng ano]	[ni +ano (> <i>nino</i>)]
斜格	<i>sa ano</i>	kay +nino (> <i>kanino</i>)
属格	<i>ng ano</i>	ni +ano (> <i>nino</i>)

- 特定性の指定のない中核項と属格にの標識は普通名詞・人名とも同音 (共時的な形態については 18 参照)。
- 疑問詞のパラダイムでは *ng* 及び *ni* は属格形としてのみ残り、特定性指定のない中核項の標識としての機能を失った。(WH 疑問文は特定の存在を仮定しているので *ng* を用いる必要がなかったため?)
- *ng* との対比がなくなったため、*ang* は述語標識として再解釈されたと考えることができる²³。

²¹ この分析は *ano* と *sino* が述語としてしか用いることができないという Shigeo Tonoike の鋭い観察に負うところが大きい(pers. comm. September, 2015)。

²² タガログ語の語根は一般に範疇指定がないと考えられている(Himmelman 2008, Kaufman 2009 among others)。同じ形が名詞、動詞、形容詞などさまざまな語彙範疇として用いられる。

²³ あるいは *ang* はもともと述語標識であったものが疑問形以外は名詞標識として再解釈された (Starosta, Pawley & Reid 1982, Kaufman 2009 参照)。

9.3.3 WH 述語としての *ano*

- 擬似分裂文に現れる *ano* は *sino* と同様、述語素性を持つ。
- (不特定の) 述語名詞句は特に形態上の標識がない。(22)
- この *ano* は述語素性を持つため、動詞の項の位置に生成されることができない。
- 従って、その位置から移動したことを仮定した構文は非文(19a)

9.3.4 WH 名詞としての *ano*

- 名詞句として使われる場合、*ano* は必ず斜格標識の *sa* を取る。
- *sa ano* という形で現れる場合、移動が必須 → 演算子
- 他の名詞と異なり、中核を示す標識 *ang* または *ng* を取るができない。

9.4 *sino* と *ano* の素性

- 三つの WH 表現の種類：述語、斜格、属格
- 他の名詞と同様、普通名詞と人名の区別によって語形が異なる。
- 他の名詞と異なり、WH 名詞は中核項として使われることができない(従って *ang* 形も *ng* 形も存在しない)。

(28)	述語	斜格	属格
[-人名]	<i>ano</i>	<i>sa ano</i>	<i>ng ano</i>
[+人名]	<i>sino</i>	<i>kanino</i>	<i>nino</i>

9.5 分析のまとめ

- タガログ語のWH表現は演算子である → WH移動が必要²⁴
- *sino* と *ano* は述語素性を持つため述語の位置にしか現れることができない → WH 移動の禁止のように見える現象
- *ang* 名詞句以外の関係節化が禁止されているため、斜格と副詞は擬似分裂文の述語としてに現れることができない。

²⁴ Richards 2010 はタガログ語のWH が元位置に現れることができない現象について、構文論ではなく、韻律に基づいた分析を提案している。

10. 結び

10.1 WH 疑問分の分析のまとめ

- C にある構文タイプを指定する素性、[uWH]が、ある集合の中から特定の個体を選び出すよう指示する。
- WH 表現は変項素性[WH]を持つ。
- WH 表現には二種類ある
 - 演算子であるタイプ → WH 移動
 - 演算子でないタイプ → 元位置ないしは擬似分裂文

10.2 トンガ語の WH 疑問文

- トンガ語の WH 表現は演算子ではない → 元位置
- 名詞句は述語標識の *ko* と併合できる → 擬似疑問文
- 述語句は範疇素性の[D]がないため *ko* と併合不可 →

(29) トンガ語の WH 表現の性質

	[OP]	元位置	移動	擬似分裂文
WH 名詞句	-	yes	no	yes
WH 述語句	-	yes	no	no

10.3 タガログ語の WH 疑問文

- タガログ語の WH 表現は演算子である → WH 移動
- *sino* と *ano* は範疇素性の[D]を持たない述語句であるため、動詞の項の位置に生成されることが不可 → *擬似疑問文
- 斜格の関係節化は不可 → *擬似疑問文

(30) タガログ語の WH 表現の性質

	[OP]	元位置	移動	擬似分裂文
WH 述語句	+	no	no	yes
WH 名詞斜格形	+	no	yes	no
WH 副詞句	+	no	yes	no

10.4 多言語に共通する観察

- 演算子として機能できる WH 表現は演算子素性[OP]を持つもののみ。
- 任意の WH 移動は存在しない。
 - トンガ語の文頭に現れる WH は WH 移動によるものではなく、擬似分裂文の述部として元位置にあるもの。
 - タガログ語で中核項が文頭に現れることができないのは WH 移動そのものが禁止されているのではなく、WH 表現の範疇素性による。

10.5 その他の関連事象

- 観察と異なり、元位置WHと疑問標識の存在には相互関係は見られない。(Cf.Cheng 1991)²⁵
 - トンガ語には疑問標識がない。
 - タガログ語には疑問標識 *ba* が任意に用いられる。
- 元位置 WH と WH 表現の不定名詞用法に相互関係は見られない。(cf.Cole and Hermon 1998 inter alia)
 - トンガ語の WH は元位置だが、WH 表現に不定名詞としての用法はない。
 - タガログ語の WH は元位置に現れることができないが、*ano* に限っては不定名詞として使わうことができる。

References:

- Aldridge, Edith. 2002. Nominalization and wh-movement in Seediq and Tagalog. *Language and Linguistics* 3: 393–427.
- Aldridge, Edith. 2004. Ergativity and word order in Austronesian languages. Doctoral dissertation, Cornell University.
- Aman, Norhaida, Peter Cole, and Gabriella Hermon. 2009. Clefted questions in Malay. In *Malay/Indonesian linguistics*, ed. by David Gil and James Collins. London: Curzon Press.
- Bauer, Winifred. 1991. Maori *ko* again. *Te Reo* 24: 31–36.
- Bauer, Winifred. 1993. *Maori*. London: Routledge.
- Besnier, Niko. 2000. *Tuvaluan*. London: Routledge
- Bruening, Benjamin. 2007. Wh-in-situ does not correlate with wh-indefinites or question particles. *Linguistic Inquiry* 38: 139-166.
- Chang, Melody Y. 2000. On Tsou wh-questions: movement or in situ? *Language and Linguistics* 1: 1–18.
- Cheng, Lisa. 1991. On the typology of wh-questions. Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist Inquiries: The Framework. In *Step by step: Essays in Minimalist Syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. by Robert Martin, David Michaels and Juan Uriagereka, 89-155. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Cole, Peter and Gabriella Hermon. 1998. The typology of wh-movement: Wh-questions in Malay. *Syntax* 1:221-258.
- Cole, Peter, Gabriella Hermon, Kozue Inoha, and Yassir Tjung. 2002. A constraint on WH in situ in Javanese. In MIT working papers in linguistics 44, the proceedings of the eighth Austronesian Formal Linguistics Association, ed. by Andrea Rackowski and Norvin Richards, 91–106. Cambridge: MITWPL.
- Custis, Tonya. 2004. Word order variation in Tongan: a syntactic analysis. Doctoral dissertation, University of Minnesota.
- Georgopoulos, Carol. 1991. *Syntactic variables: resumptive pronouns and A'-binding in Palauan*. Dordrecht: Kluwer.

²⁵ Bruening 2007 参照。

- Himmelmann, Nikolaus P. 2008. Lexical categories and voice in Tagalog. In *Voice and grammatical relations in Austronesian languages*, ed. by Simon Musgrave and Peter Austin, 247–293. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Kaufman, Daniel. 2009. Austronesian Nominalism and its consequences: A Tagalog case study. *Theoretical Linguistics* 35:1–49.
- Nishigauchi, Taisuke. 1990. *Quantification in the theory of grammar*. Dordrecht: Kluwer Academic.
- Paul, Ileana. 2000. Malagasy clause structure. Doctoral dissertation, McGill University.
- Paul, Ileana. 2001. Concealed pseudo-clefts. *Lingua* 111: 707–727.
- Potsdam, Eric. 2006a. The cleft structure of Malagasy wh-questions. In *Clause structure and adjuncts in Austronesian languages*, ed. by Hans-Martin Gärtner, Paul Law, and Joachim Sabel, 195–232. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Potsdam, Eric. 2006b. More concealed pseudoclefts and the Clausal Typing Hypothesis. *Lingua* 116: 2154–2182.
- Potsdam, Eric. 2009. Austronesian verb-initial languages and wh-question strategies. *Natural Language and Syntactic Theory* 27: 737–771.
- Potsdam, Eric and Maria Polinsky 2011. Questions and Word Order in Polynesian. In *Topics in Oceanic Morphosyntax*, ed. by Claire Moyse-Faurie and Joachim Sabel, 83-109. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Reinhart, Tanya. 1998. Wh-in-situ in the framework of the minimalist program. *Natural Language Semantics* 6: 29–56.
- Richards, Norvin. 1998. Syntax versus semantics in Tagalog wh-extraction. In *UCLA occasional papers in linguistics 21: Recent papers in Austronesian linguistics*, ed. by Matthew Pearson, 259–275. Los Angeles: University of California, Los Angeles Department of Linguistics.
- Richards, Norvin. 2010. *Uttering trees*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Schachter, Paul and Fe T. Otones. 1972. *Tagalog reference grammar*. Berkeley: University of California Press.
- Seiter, William J. 1980. *Studies in Niuean syntax*. New York: Garland.
- Starosta, Stanley, Andrew Pawley, and Laurence Reid. 1982. The evolution of focus in Austronesian. In *Papers from the Third International Conference on Austronesian Linguistics, Vol. 2: Tracking the travellers*, ed. by Amran Halim, Lois Carrington, and Stephen Wurm, 145-170. Canberra: Australian National University.
- Tonoike, Shigeo. 2015. A general theory of wh-questions. Paper presented at the Linguistics Department Tuesday Seminar. March 2015. Honolulu, University of Hawai'i at Mānoa.

Appendix. Evidence for wh-movement

A.1 In Tagalog, clitic pronouns attach to the first prosodic word within a CP.

- (ia) [Pupunta]=**akó** sa Maynila. V=CL PP
 go.FUT=1S OBL Manila
 'I will go to Manila.'
- (ib) Hindí=**akó** pupuntá sa Maynila. NEG=CL V PP
 NEG=1S go.FUT OBL Manila
 'I will not go to Manila.'
- (ic) [Sa Maynila]=**akó** pupuntá. PP=CL V²⁶
 OBL Manila=1S go.FUT
 'I will go to Manila.'

A.2 Adjunct wh-questions are mono-clausal.

- Clitic pronouns appear immediately after the wh-word (Aldridge 2004: 318)

- (ia) [_{CP} Kalia**n=ka** pumunta sa Maynila]?
 when=2S PERF.go OBL Maynila
 'When did you go to Maynila?'
- (iib) [_{CP} Saan=**ka** b-um-ili ng libro]?
 where=2S PERF.buy DET book
 'Where did you buy a/the book?'

A.3 Argument wh-questions are bi-clausal (Aldridge 2004:320).

- Clitic pronouns cannot occur after the sentence-initial wh-word (iia).
- Clitic pronouns attach to the verb → separate CP (iib).

- (iia) *_[CP ano=**mo** ang ginagawa]? *WH=CL ang V
 what=2S DET do.FUT
 Intended: 'What are you doing?'
- (iia) Ano ang _[CP ginagawa=**mo**] WH ang V=CL
 what DET do.FUT=2S.ERG
 'What are you doing?'

²⁶ This kind of PP- fronting is called "emphatic inversion" (Schachter & Otnes 1972) or 'focus fronting' (Aldridge2004).